

作成日	2025 年 6 月 11 日
学科名	食物栄養学科

自己評価：S・**A**・B・C

**評価項目① 過年度からの改善・向上の取り組み**

- (ア) 質保証の客観性・有効性を高めることを目的として、令和6年度に全学科で実施を依頼した、学生が参画したFDについて、そこで得られた成果・課題について記載してください。
- (イ) 昨年度の自己点検・評価において各組織で記述した課題・改善方策や、内部質保証推進会議からの提言を踏まえ、現時点における取り組み状況・成果について記載してください。

**参照資料**

- ・ 過年度のFD実施報告書
- ・ 令和6年度点検・評価シート
- ・ 令和6年度内部質保証推進会議からの提言
- ・ 卒業時アンケート（大学）
- ・ ジェネリックスキル測定テスト
- ・ 資格取得や進路就職状況
- ・ 各種会議の議事録等

**【現状分析】**

(ア) R6年度のFD研修会では、食物栄養学科学生14名（4回生3名、3回生4名、2回生4名、1回生3名）および全教員16名が参加して、学生からカリキュラム、科目・授業内容、運営について意見、要望を聴くと共に、教員らとの意見交換をおこなった。学生を交えての率直な意見交換、要望聴収は学科で初めての試みであり、学生のリアルな思いに接することができたのは新鮮であると同時に新たな気づきを得られた点で評価できる。R7年度も同様の形態で学科FD研修会を開催する予定である。さまざまな意見要望が出されたが、忙し過ぎると感じている学生が多いとの印象がある。管理栄養士養成機関として学ぶべき科目が決められていることからカリキュラム編成の自由度は少ないという制約はあるが、下記を検討している（ただ、R7.6.10現在実現できていない）

- ① 3回生担当科目を2回生担当に戻すこと
- ② 忙しい時期とそれほどでない時期とを平準化すること

また、月曜日の祝日に授業があることに対する忌避感があるとの声もあった。これについては、学科での管轄外であるため学年暦を作成する大学当局に報告した。

(イ) R6年度の自己点検評価について、食物栄養学科で以下の課題を挙げた。

- ① 「臨床栄養」、「健康教育」、「研究開発」の各系列と臨地実習の期間及び内容で学生の要望と一部合致しないケースがみられる。
- ② 評価項目④（成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っていること）に関して、成績評価の偏りは各教員間、各教科間で密に連絡を取ることでさらに少なくする。
- ③ 評価項目⑤（学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること）に関して、汎用的技能としての外国語の対応が不十分である。
- ④ 評価項目⑥（教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること）に関して、管理栄養士国家試験の合格率が以前の90%台から

80%台に低下してきている。

⑤ コロナ禍前は学生も参画した FD 研修を行っていたが、コロナ禍以降は講師と教員のための FD 研修となっている。

⑥ DP の各項目がカリキュラムに配置されているものの、偏りがみられる。

また、内部質保障推進会議からは、「学修者本位の教育」の実現に向け、学生の意見をふまえつつ、従来の方法にとらわれない授業運営方法の改善、向上」との指摘を受けた。

これらについて、本学科は R9 年度に新学部改組を予定していることから、今現在できること、および改組と併せて行える改善とに分けて対応しているところである。

#### 【成果】

(イ)①について、R7 年度からきめ細やかに学生の希望、要望を取り入れるようにしているため、学生からの苦情は少なくなったように見える。

(イ)③について、R6 年度から食物栄養学科主催の「フランス食文化体験研修」を始めた（参加学生 19 名）。現地で英語で研究発表するなど実践的な語学トレーニングに効果を上げている。

(イ)⑤について、学生が参画した FD 研修会では、管理栄養士に役立つ科目があるとの肯定的意見が寄せられており、肯定的な成果として引き続き維持したい。これに関連して、内部質保障推進会議からの指摘については、学生から直接かつ匿名で意見を聴収する「意見箱」を設置している。実際学生から校外実習割当に関する問い合わせ、要望が投書されており、授業運営の改善に貢献している。

#### 【課題】

(イ)②について、成績評価基準の平準化に取りくんだ結果、多くの科目で達成できたと考えているが、一部科目の担当者間で成績評価に依然として差があるケースが認められる。

(イ)④について、R6 年末の国家試験合格率は更に下がって 80%を割ってしまった。したがって、国家試験合格率の向上は大学の財政協力の下、学科を挙げて取り組むべき課題である。合格率低下の理由は学科会議で議論した結果以下の意見が出た。

1. 通年の国試対策、夏期補講、国試直前補講、アドバイザー・卒研指導教員による面談などを頻繁に行い、時に厳しく指導する一方で、足切りは行わないという「叱咤激励」タイプの国試指導をこれまで行っており、実際効果を発揮していたと認識している。しかし、その指導に応じて成績が伸びる学力が上がる学生がここ 1-2 年急激に減ったという印象がある。
2. 近年出題傾向が変化した国家試験に対して、食物教員が提供する国試対策の内容が合致しなくなっているのではないかと。

#### 【改善・発展方策】

当学科は、管理栄養士国家試験のために存在する訳ではないが、管理栄養士国家試験合格率は当学科が提供する教育効果の全体像を測る一つの指標であるとは認識しており、その合格率が低下し続けていることは深刻に受け止めている。上記に挙げた意見に基づき、基本認識として以下を共有した。

1. 「叱咤激励」タイプの指導の限界：成績が伸びない学生に対しては、シラバスに基づき公平、

厳格に成績評価を行い、その結果管理栄養士国家資格受験資格を得られないことがありうるとの認識を学生、教員共に促す。

2. 外部から講師を招き、国家試験対策に外部目線を入れる。これにより、学生、教員ともにこれまでの指導内容を見直す機会とする。具体的には、当学科が提供する教育効果を上げ、合格率向上に繋げるために、①外部目線による国家試験特別演習教授法の見直し ②管理栄養士国家試験出題基準（ガイダンス）と教員が提供する講義内容との適合の再確認 ③管理栄養士特別演習評価の適正化 を R6 年度に続き R7 年度も継続している。

教員の指導態度に対する厳しい評価が卒業アンケート中に散見されるため、学生とのコミュニケーション、指導には学修者本位というコンセプトを学科で共有する。

自己評価：S・A・B・C

<p><b>評価項目② カリキュラムの適切性と成果</b></p> <p>(ア) DP、CPに基づき、体系的な履修を促すカリキュラムとなっているか、記述してください。</p> <p>(イ) カリキュラムにおける常勤、非常勤の担当教員のバランスは適正か、記述してください。</p> <p>(ウ) DPの達成につながる学修成果を得られているか、ジェネリックスキル測定テストや卒業時アンケート結果等を分析・活用して、検証してください。</p>
<p><b>参照資料</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カリキュラムマップ、ツリー</li> <li>・単位修得要領</li> <li>・シラバス</li> <li>・科目群別非常勤教員比率</li> <li>・ジェネリックスキル測定テスト</li> <li>・卒業時アンケート（大学）</li> </ul>

**【現状分析】**

(ア) 「食物栄養学科 学位授与の方針」において、高度の知識・理解・技能を有しているものに学位を授与している。幅広い教養や汎用的技能を学んで、日本語で正確に表現する力を身に付けるとともに、データを分析して活用する能力を身に付けた上で、健康と食に関する様々な授業で専門的な知識を段階的に習得していく教育プログラムとなっている。また、実験実習を通して、調査やレポート作成、プレゼンテーション能力を習得し、発表の機会を与えることで、成果を明確化している。さらに、校外実習を経ることで、社会性や自律性、リーダーシップを養える。また、「食物栄養学科 教育課程編成・実施の方針」において、学年・semesterの進行ごとに学びを高め深めていくよう体系的に科目を配置している。

(イ) 食物栄養学科では、高い比率で常勤教員が科目を担当している (68%@2024)。これは、管理栄養士必修科目は可能な限り専任教員が担当するという方針によるためである。同時に、非必須科目は非常勤講師が担当することは年々増えている (32%@2024)。これにより、常勤教員が教育・研究のレベルアップに繋がる時間的余裕の確保に貢献している。

(ウ) 学生の学習成果は、卒業アンケートと授業アンケートにより把握、評価している。学位授与方針にあるように、食物栄養学の分野において、高度の知識と理解を有して、主体的に思考と判断ができるように、学習成果を評価している。実際に、授業課題や学生間のディスカッションをもとに、主体的に学び続ける能力や課題解決能力が卒業時アンケートでも学生がついたと実感している。ただ、「母語以外の特定の外国語が運用できる」項目は引き続き低い。さらに、本学科

学生の傾向としてリテラシーは高いが、コンピテンシーが低いという結果が示されており、対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力という面で伸び代が残っている。

#### 【成果】

母語以外の外国語の運用が低い点については、「科学英語 A」を能力別、かつ少人数クラスに編成することで引き続き改善を図っている。さらに、「食」を軸に外国語を使うというコンセプトにフランス語食文化研修を開催した。学生自身がフランスボルドー大学で英語で日本文化・日本食をプレゼンするという企画では思いの外堂々と発表する様子が観られたことから効果が現れているようにみえる。

#### 【課題】

本学科学生の傾向として挙げられた高リテラシー低コンピテンシーは、校外実習先などからの評価（京女生は優秀で真面目だが、大人しい）に通じるものがあると考えられる。この評価は必ずしも悪いことではないが、バランスという点で課題がある。

#### 【改善・発展方策】

低いと評価されたコンピテンシーを向上させるためには、小さなグループ、少人数で発表、行動、企画するなどが有効だと思われる。これを演習科目である食物栄養研究法 I・II・III、基礎の化学、科学英語 A などで導入できるか、できるならどのような形態でというのを R7 年度中に取りまとめたい。

自己評価：□・A・B・C

#### 評価項目③ 成績評価

- (ア) 成績分布は、教員間で評価のバラつきが生じていないか。また、学科において検証・調整されているか記載してください。
- (イ) 成績評価、フィードバック等がシラバスに基づき適切に実施されているか、学修行動調査やALCS学修行動比較調査等の結果（評価の公平性の学生満足度）から検証し、記載してください。

#### 参照資料

- ・各科目の成績分布
- ・学修行動調査の成績評価に関する設問
- ・ALCS学修行動比較調査（1・3回生）の「69. 評価のされ方」満足度結果

#### 【現状分析】

(ア) 成績評価は授業により異なるが、試験、レポート、授業への取り組み、発表等によりシラバスに記載の割合で評価し、成績評価と単位認定を行っている。複数教員が担当する科目の場合には、カリキュラムのすり合わせや試験の共通化、平均点の調整等を行うことで、成績評価の偏りを無くしている。ただ、ALCS学修行動比較調査等から成績評価に必ずしも満足していない学生が一定する存在することがわかる。また、複数開講されている同一科目において担当者間で評価の偏りがみられる。これをうけて、R6年度は、評価の平準化を目的として担当者間で講義資料、試験問題、評価ポイントの確認をおこなった。

(イ) シラバスの成績評価ポイントが適切に設定されていることは、担当者間チェックを通して別の教員により指定された基準を満たしていることを確認している。また、本学科1・3回生に

よる ALCS 学修行動比較調査「69. 評価のされ方」満足度結果は、特に低値を示すこともなく、全国平均とも大差ない値を示していることから、シラバス通りの評価が行われていると認められる。

#### 【成果】

複数開講されている同一科目の成績標準化を達成するために令和6年から始めた担当者間による評価ポイントチェックは学科を挙げての取り組みとしては初めてのものであった。担当者の成績標準化の必要性への意識向上および意思疎通向上に効果があった。

#### 【課題】

標準化に課題があると思われる科目がまだ存在すること、そのために受講クラス間で不公平感が表明されるケースがあることは引き続き解決すべき課題である。

#### 【改善・発展方策】

複数開講されている同一科目の担当者間における成績の標準化のため、数値データに基づいた客観的議論を行うことが効果的だと考えられる。教務データ「成績評価分布（2023-2024）」を活用し、客観的現状認識をR7年度中に行いたい。